

蛙のうた

—ある編集者の回想—

臼井吉見



筑摩叢書 188

筑摩叢書 188

蛙のうた

—ある編集者の回想—

臼井吉見



筑摩書房

臼井吉見 (うすい よしみ)

1904年 長野県に生まれる

東京大学国文科卒

評論家

著書——「人間と文学」「あたりまえのこと」

「どんぐりのへた」「小説の味わい方」

「近代文学論争」により芸術選奨

文部大臣賞を受く。

「安曇野」(一,二,三部。四部は雑誌

「展望」に連載中)

蛙のうた—ある編集者の回想—

筑摩叢書188

1972年2月25日初版第1刷発行

¥ 850

著 者 臼 井 吉 見

発 行 者 竹 之 内 静 雄

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8

TEL 東京(291)7651 (代表)

振 替 東 京 4 1 2 3

郵便番号 1 0 1 — 9 1

©1972

曉印刷・永興舎

(分類)1095(製品)01188(出版社)4604

目次

八月十五日	三
隣は何をする人ぞ	八五
二つの検閲	一六三
「第二芸術論」前後	二二
誤訳・悪訳・珍訳	二五二
作家と作品	二七四
「展望」休刊前後	三三三
あとがき	三三一

蛙のうた

——ある編集者の回想——

八月十五日

敗戦の「玉音放送」は、千葉県八日市場から六キロほど奥まった山村の法華寺近く、農家の庭さきで聞いた。

六十人あまり、整列したまま、聞いた。この仲間は、正式な呼び名によれば、東部軍決二二四五部隊第二大隊第六中隊第二小隊であるが、通常は臼井伐木隊と呼ばれていた。

動員が下令されて、決部隊のできたのは、昭和十九年八月、サイパンの玉砕発表と同時だった。つまり、大本営が本土防衛を決意して編成した最初の部隊で、アメリカ軍の主力が東京占領のため、関東地区に上陸してくるのを迎え討つ、もっぱら攻撃の任務を課せられていた。もっとも、そんなことを知ったのは、ずっと後のこと。一年前に、郷里の松本連隊に召集されていた僕は、千葉の歩兵学校を解散して、その将兵を基幹として新編成された、この精鋭部隊にくりこまれたのであった。



動員が下ったとき、わがいのちもこれでおしまいと思った。なんという、みすばらしい生涯か

と思った。なぜなら、今度の動員はこれまでにない本格で、各分隊十二名ずつの正式定員であり、歩兵部隊のくせに、馬がいやに多い。これは、南方であれ、北方であれ、島行きではないということだ。そうなると、大陸だ。

といって、中国ではない。装備甲だからだ。相手が中国兵なら、装備は乙のはず。甲といえば、敵はアメリカ兵でなければ、イギリス兵だ。そうなると、行く先はインドか。フィリピンかも知れない。これは島ではあるが広大だから。サイパンが落ちたというのに、インドなり、フィリピンなりへ、やられるのは、途中の海へ沈むことにきまったようなものだ。ここ半年、松本駅から次々に送り出した部隊の大半がそうだったように。

松本連隊で編成を終えた決部隊は、北アルプス中央登山口の中房温泉に近い、陸軍演習地に移り住んで、もっぱら対戦車戦闘と、米軍陣地攻撃の訓練をくりかえした。夜陰にまぎれ、蛸つぼを掘ってひそみ、這い出しては、また掘り、戦車が現れれば、爆薬入りの蜜柑箱を背負ったまま、次々とびかかり、生き残ったものが、敵陣地にとびこむという戦法であった。わけても、これの「二十四時間訓練」というのは、骨身にこたえた。飲まず、食わず、眠らず、しゃべらずの二十四時間ぶっ通しの訓練が、週に二回くりかえされた。僕は、ひそかに「爬虫類戦法」と名づけていた。人間がその昔、爬虫類だったときのすがたに戻って、アメリカの中型戦車に立ち向かうという、雄大きわまりない戦法であった。

軍が、将校だけに耳うちした説明によれば、アメリカの重戦車というのは、とんでもなく巨大だから、これは持って来ないだろう、これが来たら、肉薄攻撃だろうと、なんだろうとお手あげ

だ。中戦車なら、速射砲は役に立たないが、蜜柑箱を背負ってとびかかれば、やっつけることができるというのであった。こうなれば、アメリカが、なんとか工面して、重戦車を持って来ないだろうかという僕の妄想は、われながらなさけなかった。重戦車に対しては、さすがの爬虫類戦法も無駄なことを知っているらしいことが、せめてもの救いだったのだ。

「二十四時間訓練」は、腹這いながら、草の露をなめ、時には草まで食ったが、渴きと飢えは、まだしも我慢ができた。ねむけも、どうにかこらえた。どうにも堪えがたいのは寒さだった。十一月の終りごろからの夜明け前の苦痛といったらなかった。腹の下に、新聞紙を一枚敷いておくだけでも助かった。

二十年四月、わが部隊は、急遽、九十九里浜に出動することになった。米軍の本土上陸は、思いのほか早まって、一年さきの二十一年四月と推定されたからであり、アメリカが主力を持ってくるのは、九十九里のほかはなからうというわけ。地勢に明るい千葉歩兵学校の将兵によって、この部隊が編成されたのも、それを考えてのことだったらしい。

攻撃を任務とする、わが決部隊は、防禦部隊（守備位置を固守するところから、ハリツケ部隊ともいわれた）のはるか後方、つまり成田から銚子をつらねる線にあって、上陸する敵を迎え討つ手筈だった。そのための陣地もできたのだが、召集もれを狩り集めてつれて来た防禦部隊は、陣地がさっぱりはかどらない。そこで、その応援のため、部隊は八日市場まで進出したのだ。そして、部隊の引き受けた陣地のための用材を準備するため、精鋭なるわが第六中隊第二小隊は、臨時に伐木隊を仰せつかったのである。

先祖の残した見事な森や林を公定価格で片っぱしから伐り出すのだから、意気さかんな青年士官を隊長にしては、民衆の反感を招くやもはかりがたい。軍事能力は話にならず、杉と檜の区別もあやしいが、年だけはとっているらしいから、臼井少尉がよからうということになったものようである。

わが伐木隊の本拠は、部落の中央、丘の上の法華寺の本堂だった。兵隊たちは、そこで寝起きしていた。隊長室は、方丈の八畳が当てられた。下士官を信頼し、彼らに引率させて、兵隊たちを作業に出してしまうと、僕は、しばし、隊長室に寝ころがって、ゆっくり新聞を読んだ。東京の一紙しか配られて来ず、それもペラ一枚の二ページだけ。僕は隅から隅まで丹念に読んだ。トッブ五段ぬきの大本営発表は、はなはだあやしく、真実の重大記事ほど小さく出ることに気づいてからは、こまかなところに目をくぼるくせがついていた。

七月のはじめだったろうか。一段三、四行の小記事、すなわち重大記事が目にとまって、思わずやりとした。駐米大使の宋子文が、大統領に会い、すぐモスクワに飛んで、スターリンと会谈、中国へ帰って、こう演説したというのだ。いわく「中国今後の問題は、戦後の問題である」と。ははあ、ソ連参戦か、中国はもう勝った気にいるんだナ、法華寺の方丈にあって、伐木隊長はそう判断した。

空襲がひどくなつて、全国の町々が次々に焼きはらわれた。部隊本部のある八日市場へは、ひる日なか、敵の艦載機が、まるで散歩のように、ふらりとやってきて、屋根をかすめるばかりに、

機銃掃射をあびせた。房総地方には、あっちにも、こっちにも、陸海軍の飛行場があるはずなのに、これに立ち向かう、ただの一機もありはしなかった。

夜は夜で、異常な光景が見られた。夜空をとどろかせて、B 29の大群が渡って行ったこともある。敵機なのか、味方機なのか、見当もつかないのが、まっ赤に燃えながら、空を泳いで来て、近くでおっこちるのもあった。

夜なかには、警戒警報はいうに及ばず、たとえ空襲警報だろうと、伐木隊長は、いっさい無視することばかりにきめていた。こんな山寺へ、貴重な爆弾を落すバカはあるまいと思ったからだ。もとより、軍紀はきびしい。警報のたびに、兵隊をたたき起し、所定の場所に避難させるよう、嚴重にきめられていた。だが、そんなことをやっていたら、兵隊は一晚中眠るときがない。現に、八日市場の部隊などは、寝不足のため、兵隊はフラフラになっているとか聞いた。

わが伐木隊にあっては、警報が出れば、隊長だけが起きていることにきめられていた。その代り、存分昼寝をしていたのだから、なにも隊長だけが起きていることにきめられていた。その代りではない。警報で起されると、おもむろに軍服をつけ、軍刀を握って、本堂の階段に腰をおろした。そして、空を渡る敵機のおとずれと、本堂に交響する兵隊のいびきに耳を傾けていると、悠久の思いで胸がつまった。悠久の思いとは何かと聞かれても、いまとなって、返答はできかねる。言ってみれば、人類とか文明、世界とか日本に関することがらだった。その過去、未来にわたる性質のものであった。この場合、未来というのは、われわれがアメリカ戦車の下敷きになったからのこと、その何十年、何百年さきのことだ。そして、日本が、この野蛮と愚劣にまで自身

を追いつめたいくじなさを思わないわけにはいかなかった。

本堂から聞える兵隊のいびきは、いつまでも悠久の思いなんかにはふけらせておくはずはない。結局、考えの落ちつくところは、明年四月、アメリカ戦車を迎えて、いま、いびき最中の六十幾人の部下に、どんな命令を下したのかということであった。どう考えたって、こんな愚劣きわまる情況のなかで、この六十人に、蜜柑箱を背負ってとびかかることを命ぜられるはずはない。中隊長であれ、大隊長であれ、あえて強制するなら、そこに蜜柑箱を投げつけるほかはない。そこまでは、はっきりしていた。

といって、無抵抗のまま、むざむざ戦車の下敷きになるのもバカげている。さて、どうしたものか？ 毎夜のように、警報で起され、本堂の階段に腰かけながら、考えのおちつくさきは、このことであった。考えられるかぎりの場合を考えたが、どうどうめぐりで、発展はしなかった。

それにつけても、東京に残っている友人たち——唐木順三、古田晁、中村光夫たちは、いまだごろ、何を考えているだろうかと思った。

唐木順三と古田晁が、陣中見舞にやってくるから、二カ月近くになる。僕はまだ伐木隊長ではなく、利根川べりの滑川町にいた。ここは鮒つりで知られたところ、つり宿に、農家に作らせたどぶろくを持ちこんで、久しぶりで快談した。そのときは、これほど戦況が急迫していなかった。どんな形で戦争が終結するか、いずれにせよ、そのときを期待して、われわれの計画だけは立てておこうというような話にはなったが、二升のどぶろくをもってしても、意気あがるといふわけにはいかなかった。ちなみに、このどぶろく、別々の農家にたのんだのだが一升は五円、

別の一升は二十五円だった。

われわれのもくろみというのは、出版についてだった。古田晁は、筑摩書房の社長であり、唐木順三と僕の二人は顧問格だったが、少しはましな本を出そうというので、同志的に結ばれた仲間だった。

古田晁は、中学以来の相棒で、大学時代は、下宿も同じだった。倫理学科の卒業を前にした彼から、今後の針路について相談をかけられたとき、僕は言下に、出版をやれ、といった。この煽動は彼として思いがけないものだったらしいが、独特の勘で、即座に期するところがあったらしい。さっそく、郷里の先輩岩波書店主をたずねた。岩波氏の意見は、はっきりしたものだ。出版など失敗するにきまっている、絶対にやめろ、というのである。やはり同郷の古今書院主の答えも同じだった。あきらめた彼は、カリフォルニアへ渡った。そこで貿易商を営んでいた彼の父は、ひとり息子が大学を終えて、手伝いに来てくれるのを待っていたのである。

彼は日本を離れようとして、僕を高崎の連隊へたずねてくれた。かねて甲種合格だった僕は、幹部候補生として、そこへぶちこまれて二カ月目、上等兵になったばかりだった。外出など許されようもなく、衛兵所わきの待合室で、ボソボソ話しただけで、お茶一ぱい出るわけもなく、なんとともみじめだった。満洲事変のはじまる前年のことである。

それから八年、大陸の戦線はひろがるばかり。高崎連隊の仲間で、下士官で帰された連中は、ことごとく召集され、大半は戦死してしまった。そのころ、帰国した古田晁は、初志を貫いて出版をはじめると言う。その挨拶状を書け、雄大なのがいいという。よし来た、とばかり、「皇師

百万海を越えて戦いつつあるとき……」といったふうの文句をつらねた覚えがある。てれくさななんか、蹴とばして書いたのだから、いま、その一枚でも出てきたら、赤面どころではないだろう。挨拶状をくばると、古田晁とつれだって、千葉県成田へ出かけて行った。彼を唐木順三に紹介するためだった。唐木順三は、中学で僕らより一年上級だったが、古田晁はそれまで直接には知らなかったからだ。

唐木順三は、さきに奉天の教育専門学校の教授をしていて、軍隊を終えたばかりの僕に誘いをかけてくれた。ものぐさの僕は、満洲まで出かける気にはなれなかった。同校はまもなく廃止とぎまって、彼は帰国して、成田のお不動さまの経営する女学校の教師になっていた。

彼は、数年前、すでに「現代日本文学序説」の著者であった。平野謙は、本書によって、近代日本文学史についての目を開かれたと語っている。これについての三十枚に及ぶ書評が、平野氏の世に発表した最初の文章だったという。「フティ・ブルデョア・インテリゲンツィアの道」という副題がつけられていたというから、その批評が、どんなものだったかの見当はつく。同時にまた、唐木順三の最初の著書のおよその性格も察しがつく。左寄りではあっても、精鋭な平野氏を満足させるまでではなかったということになる。

唐木順三が、はじめて世に問うたのは、「芥川龍之介の思想史上の位置」と題する評論で、芥川龍之介を強く否定することで、これを超えようとする熱っぽいものであった。三木清の推薦で、岩波書店の「思想」に発表されたが、前記の書には、歯切れのたしかな、この種の作家論が収められている。

彼を成田にたずねたとき、客よりは主人が、したたかに酔った記憶はあるが、なにを語ったかは思い出せない。しきりに引きとめてくれたが、辞して帰る暗い町通りを、彼の大声が響きわたったこと、汽車に乗りこんだ僕らにむかって、改札口で、なにやら、まだわめいていた姿だけは浮んでくる。

彼は、西田幾多郎を慕って、大学は京都の哲学科へ行ったため、ほとんど語り合う機会がなかった。酒についての実力のほども、このとき、はじめて知らされたのだった。天成の素質もあらうが、奉天あたりでの習練のたまものかと思った。

いま考えてみると、この成田時代すでに、いくらか隠者風をおびていたが、思想的には摸索時代だったと思われる。

筑摩書房は、西銀座の小さな貸ビルに陣取った。さて、だれのどんな本を出したのか？ 駈出しの出版社などが、ねらいをつけた著者にやすやすと承諾してもらえようはずはない。

僕のまず考えたのは中野重治だった。僕が東京の大学へ来たとき、正門前の書店で手にした同人雑誌に「驢馬」というのがあった。「辻馬車」「山繭」「青空」「風車」など、いくつか出ていた同人雑誌のなかで、とりわけ、薄っぺらだったが、表紙いっばいに書かれた誌名の書体がすがすがしかった。

金沢の四高から来て、室生犀星のもとに集まった連中が中心らしかった。まもなく「驢馬」は出なくなってしまったが、一高寄りに古雑誌専門の本屋があって、これの既刊分数冊を手に入れ

た。同人のひとり中野重治の詩と、小さな評論を読みたかったからである。

ここは西洋だ

イヌが英語をつかふ

ここは礼儀正しい西洋だ

イヌがおれをロシヤオペラに招待する

ではじまる「帝国ホテル」とか、

顔の黄色いのが居る

眼鏡が居る

羽織

るばしか

釦の直径が一寸もある外套が居る

乞食のやうなものも居る

ではじまって、

正門のあたりをぞろぞろ歩いて居る

ふつとぼーるばかり蹴つてるのも居る

で終る「東京帝国大学生」とかいって詩がそこにあった。こういう詩に、同感できるものが、こっちにもあったということになるのだろう。

大学で、一度だけ、彼の講演を聞いたことがあった。啄木についてだった。

はたらけどはたらけどなほわが生活案にならざりちつと手を見る——この歌は、どうも好きになれないと言った。「ちつと手を見る」がいやだと言った。「たはむれに母を背負ひてそのあまり軽きに泣きて三步あゆまず」というのも、きらいだ。「軽きに泣きて三步あゆまず」がいけない。「三步あゆまず」もいやだが、「軽きに泣きて」はもっといやだと言った。話全体は啄木を高く評価したものだだったが、いやだ、きらいだといった点だけ、はっきり覚えてゐる。

鳥打ち帽、下駄ばきのすがたを、文学部の事務所附近で見かけたこともある。そんな程度で、彼などが中心になっているらしい、学内の左翼的な文学研究団体などには近づこうともしなかった。そのくせ、彼の書くものは、残らず読んだ。いつのまにか、そうなっていた。

そんなわけで、まず、中野重治の本を出したかった。古田晁と二人で、豪徳寺の家を訪問した。道路に面して竹屋があって、彼の家は、それと背中合せだった。僕は初対面の人と気軽に話せるたちでなく、相手ときたら、それに輪をかけたものといっていだらう。用件だけをしゃべってしまった、もう話はなかった。床の間にもちこまれた本棚の東洋美術史関係の本の背中を眺めながら、